「二〇一八年　道教週」参加報告記

酒井規史
廣瀬直記

二〇一八年七月十二日から十八日まで、臺北で「道教週」が開催された。國立政治大學の華人宗教文化研究中心と華人文化主體性研究中心、および輔仁大學宗教學系の共催による大規模な研究集會である。その名のとおり會期は一週間にわたり、三つの國際學會および講演會・討論會が連續して開催された。今回、筆者ふたりは「道教週」に参加し講演と研究發表をする機會を得たので、その様子を報告することにしたい。[1] なお、日本からは當會會員の松本浩一氏と丸山宏氏も研究發表を行った。

「道教週」は二年前にも政治大學主催で開催されたが、今回はそれを繼承・發展させたものである。[2] 前回の「道教週」と同じく、國立政治大學の謝世維氏と林振源氏がオーガナイザーを務めるほか、今回は輔仁大學の張超然氏も加わっている。三者いずれも文獻資料に精通する一方、現地調査の經驗も豐富であり、廣い視野を持った研究者である。[3]

今回の「道教週」では幅廣い分野の發表が行われ、現在行われている道教研究を網羅するかのようなプログラムが實現したのは、三人のオーガナイザーの見識によるものであろう。また、總勢三十名ほどが登壇したが、べ

テランから若手まで各世代が配置されており、研究者の顔ぶれという點でも現在の道教研究を包括的に示していたといえよう。

七月十二日と十三日は、政治大學で「當代中國道教口述歷史（1949–present）國際學術研討會」が開かれた。二年前の「道教週」でも同じテーマで會議が行なわれたが、オーラルヒストリーという研究方法が現在これほど注目されているのは、一九四九年以降（中華人民共和國成立以降）の當代（現代）道教を研究するための基本資料が大きく不足している、という現狀認識にもとづくようである。今回は、福建・河北・廣東・浙江・上海・陝西・香港・マカオ・湖南の各地において各研究者が繼續的に行なっているフィールドワークの成果が報告された。いずれも現狀報告のみに終始するものでなく、一九四九年以降の道教史をオーラルヒストリーと文獻資料によって構築するという共通目的のもとに進められ、同時にそのための新たな基本資料を蓄積し提供することも意圖されていた。

筆者自身はフィールドワークを行なっておらず、十分に理解できない點もあったが、多くの發表者が注目し、最後の總合討論でも話題になっていたのは八十年代以降の道教復興に關する問題である。その中でも特に興味深いと思ったのは、これまでの道教研究において、歷史上の道教をめぐって問われていたさまざまな問題（道士と道教の定義に關する問題や、中央による各地の道教管理の問題、道教と地方神廟の關係など）が、道教復興という動きのなかで現實的な問題として浮かび上がっていることである。そして、そこに現實に生きている道教を研究する意義を強く感じることができた。もちろん、過去と現在の道教は大きく異なっており、それを單に復興と捉えるべきなのか、という議論も交わされていたが、そのような問題があるにしても、この會議での議論は文獻資料を研究對象とする研究者にとっても大きな刺激になると思われる。報告を行なった研究者および發表題目は以下の通りである（發表順、敬稱略。所屬は學會開催當時のもの

である。以下も同じ。）

謝世維（國立政治大學）
「當代道教研究方法之反思：朝向道教口述史觀點」

羅丹（中山大學）・徐天基（深圳大學）
「河北省廣宗及其周邊縣地方道教歷史：一九二〇―當代」

李志誠（香港中文大學）
「當代中國道教的跨地域網絡建構：以一九八〇年代至今香港及澳門道教與內地的交流爲中心」

陳敬陽（蓬瀛仙館、香港理工大學）
「一九八〇至一九九〇年代的廣州道士」

潘君亮（パリ第七大學）
「溫州道教協會的建立與道教的組織管理」

巫能昌（復旦大學）
「一九四九年以來的上海道教歷史：以科法傳承和廟宇系統爲中心」

（以上、十二日。）

呂燁（國立政治大學）
「西安城市道教的恢復與發展：以八仙宮與明聖宮爲例」

田彥（湖南省民協梅山文化研究會）
「湘中梅山師教經典著錄與科儀應用：以新化縣田坪鎮陽君壇爲例」

林振源（國立政治大學）
「新資料・新視野・新問題：當代中國道教口述史綜述（一九四九―二〇一七）」

（以上、十三日。）

なお、會議は兩日とも午前、午後の二部構成であり、「口述歷史」の發表は午後の部で行なわれた。午前の部では、主に六朝から明代に至るまでの道教史に關する講演が行なわれ、一九四九年以降のオーラルヒストリーとあわせて、道教史全體を見通すことが意圖されていた。發表者および題目は以下の通り（發表順、敬稱略。）

李豐楙（國立政治大學・中央研究院）
「道士與禮生：近年福建地區的迎王祭典」

譚偉倫（香港中文大學）

「細說普庵咒：歷史文獻和口述資料」
廣瀨直記（專修大學）
「六朝道教文獻中的道士稱號：論道士的自我定位」
（以上、十二日。）
Florian C. Reiter（フンボルト大學）
“Considerations of pre-Song Exorcism and its Relationship with Heavenly Masters Taoism”
許蔚（上海社會科學院）
「談宋明道教法派與法術的研究進路：以淨明法・清微法爲主」
王崗（フロリダ大學）
「明代王府與地方道教」
（以上、十三日。）

七月十四日も政治大學が會場となり、まず午前中に李豐楙氏の講演會「新書發表：華人宗教、文化與地方社會」が開催された。これは李氏が『從聖教到道教：馬華社會的節俗、信仰與文化』（國立臺灣大學出版中心）を出版したのに合わせたものである。周知のとおり、李豐楙氏は臺灣における道教研究の第一人者であり、現在も一線で活躍している。近年、李氏はマレーシアにおける華人の宗教活動を調査しており、今回はその成果を總括する內容の講演會であった。さらに、調査に協力した蔡源林（國立政治大學）・陳美華（南華大學）・邱炫元（國立政治大學）氏らとの討論會「重返東南亞華人宗教與社會文化研究」も引き續き行われ、調査の回顧と今後の展望が語られた。近年、東南アジアにおける華僑社會の宗教活動について關心が高まっており、新しい潮流について知ることができた。[4]

午後からは「學術論壇暨儀式展演：華人宗教文化之驅邪儀式比較研究」が始まった。前半は惡鬼を退治する「驅邪」の儀式について、臺南と福建のケースについての報告があり、臺灣と大陸の異なる儀禮の傳統について檢討が行われた。後半は現在の中華圈における「華人宗教文化」をあつかう研究報告が行われ、江西・湖南における現地調査の成果や香港映畫にみえる道教のイメージ

などが主題となっていた。なお、發表者は若手中心であり、新しい世代の息吹が感じられるものであった。この午後のセクションで登壇した發表者および題目は以下の通りである（發表順、敬稱略。）

Stephen M.Flanigan（ハワイ大學）
「結構・空間與歷史：以臺南小法看見法運動」
巫能昌（復旦大學）
「做覡：閩西客家地區的道教驅邪傳統」
呂燁（國立政治大學）
「飜九樓：贛東北師公的開光儀式」
田彥（湖南省民協梅山文化研究會）
「與神協商：湘中梅山師公的治病儀式『和壇』」
李志誠（香港中文大學）
「香港驅邪電影與道教文化」

七月十五日は、前日から引き續き「學術論壇暨儀式展演：華人宗教文化之驅邪儀式比較研究」が開催された。午前中は道士の儀式を見學し、午後は道士の話を聞きながら討論會が行われた。

まずバスで新北市にある北海顯妙道壇に移動し、朱建成道長の「臺北道法二門法場：落河搖孩兒」と題する儀式を見學した。朱道長は二年前の「道教週」でも儀禮の實演を行っており、今回も同様に儀式の實演と學術的な討論を組み合わせるという試みが實踐された。

朱道長は父親から儀式の傳統を繼承しつつ、獨自に新しい要素を組み入れており、そのコンセプトについて解説があった。それに續き、香港の林德强道長（飛雁洞佛道社）からは「驅邪之善導先靈：以香港道教科儀爲例」と題して、各地の道士・道觀との交流によって、新たに儀式の傳統が確立している現況が語られた。現役の宗教職能者の證言に對して、研究者側から多くの質問が出され、活發な議論が行われた。

七月十六日から十八日は會場を輔仁大學に移し、「歷史與當代地方道教研究國際學術研討會」が行われた。こちらも二年前に行われた同タイトルの國際學會とその研

究プロジェクトを繼承したものである。「歴史」と「當代（現代）」、つまり歴史的な文獻資料と現在の現地調査や統計資料などによって、各地域における「地方道教」の展開や獨自の傳承・儀禮などを考察しようとするものである。

講演や發表は研究對象となる時代に沿って配置されており、十六日は「歴史」に重點を置き、唐代から明代にかけての問題をあつかった研究報告がラインナップされていた。神々の信仰・儀禮の傳統といった道教のソフトの面、および道觀や廟などのハードの面の兩方から、各地域における道教の宗教活動や傳承の展開、中央（朝廷）との關係が檢討された。

十七日と十八日はフィールドワークや、各種のデータを用いた「當代（現代）」の各地域の道教に關する研究發表が行われた。調査の範圍は廣東・福建・マレーシア・臺灣・江蘇・浙江・江西・河北と、大陸から東南アジアまで網羅されていた。主に儀式をあつかうものが多く、王爺や眞武など特定の神々への祭祀・死者の救濟・師弟間の教法の傳授など様々なケースについて報告がなされた。また、道觀・道壇や廟の各種統計データを計量的に分析して、宗教活動やその範圍の變遷を檢討するなど、現代的な手法を用いた研究報告もなされた。

文獻と現地調査の兩方に通じた研究者も多く、歴史的事象と現在の狀況の雙方向から各地の道教を檢討しようというコンセプトが明確な學會であった。ふだん文獻資料を主にあつかっている筆者にとって、現在の各地における信仰・宗教活動の實態を知り、視野を廣げることができる貴重な機會であった。

この學會で登壇した研究者および發表題目は以下の通りである（發表順、敬稱略。）

李豐楙（國立政治大學・中央研究院）
「入冥之鑑：十王圖中道教與佛教地獄觀的交流」

謝世維（國立政治大學）
「宋元道教淸微派儀式框架：以淸微告斗解厄儀爲例」

Florian C.Reiter（フンボルト大學）
“Some considerations of common approaches in

Taoist exorcism: a comparison between Jinhuo tianding dafa 金火天丁大法 and Tianpeng fumo dafa 天蓬伏魔大法”

松本浩一（筑波大學）

「鍊度的「鍊」：基於宋元道教齋醮科儀著作」

酒井規史（慶應義塾大學）

「元明時期的洞霄宮：以道教管理制度與道士之間的交流爲中心」

張超然（輔仁大學）

「規模與取捨：近世黃籙齋儀變遷與明初儀式改革」

王崗（フロリダ大學）

“Tianfei Palace, Qingwei Lineage and Local Society in Ming Tianjin”

（以上、十六日。）

譚偉倫（香港中文大學）

「半佛半道：普庵的一個歷史詮釋」

洪瑩發（中央研究院）

「送王遣瘟：福建・馬六甲・臺灣代巡道教儀式的比較」

高振宏（國立政治大學）・鄭有容（臺灣大學）

「『法海遺珠』・『道法會元』中道法系統的數位人文研究：宋・元・明道教官將網絡分析」

巫能昌（復旦大學）

「宋元以來江蘇常熟眞武崇拜考」

潘君亮（パリ第七大學）

「蒼南玉籙齋血湖醮田野調查報告」

呂燁（國立政治大學）

「贛東北橫峯靈寶派：三朝醮個案」

羅丹（中山大學）

「河北省廣宗縣道教度亡儀式研究」

徐天基（深圳大學）

「當代華北鄉村的表功師傅：冀東南的例子」

（以上、十七日。）

丸山宏（筑波大學）

「臺南道教傳統形成史初探：以臺南與浙江磐安的朝科科文比較爲中心的考察」

林敬智（國立政治大學）

「當代府城延陵道壇儀式服務的空間分析與社會網絡分析」
謝聰輝（國立臺灣師範大學）
「閩中瑜珈法教神譜的建構與特質初探：以閩中尤溪・大田與永安三縣調查爲主」
林振源（國立政治大學）
「地方道教儀式比較研究：以臺灣・閩南・浙南・贛東北爲中心」
Kenneth Dean（シンガポール國立大學）
「新馬道教與地方文化：怎樣運用地理訊息系統當做合作研究平臺」

（以上、十八日。）

今回の「道教週」は二年前と同じプロジェクトを繼承しているため、參加者は重複している場合が多く、お互いの研究活動をよく知った上で活發な質疑が行われた。會議中だけでなく、休憩時間や食事中も時にメンバーを入れ替えながら引き續き討論をすることもしばしばであった。研究者同士の繼續的な交流が議論の深まりを生み出しており、今後より大きな成果を結ぶことが期待される。

今回、筆者はふたりとも全日程に參加することはかなわなかったが、それでも數日間連續で多くの發表を聞き、研究者と交流した事で非常に啓發を受けた。得られた知識と情報はあまりに多く、少し消化不良氣味ではあるものの、フィールドワークや文獻を用いた最先端の研究を網羅的に知ることができた。この報告記によってその一端をお傳えできれば幸いである。

なお、紙幅の都合でそれぞれの研究發表の詳細を記すことはかなわなかったが、今回の「道教週」における研究發表の成果の一部は、政治大學華人宗教研究所發行の『華人宗教研究』で公刊されている。詳細はそちらを參照していただきたい。

註

(1) 「當代中國道教口述歷史國際學術研討會」については廣瀨、ほかの部分は酒井が執筆を擔當し、最終的に兩者

で全體の內容を檢討した。廣瀨は「講演」という枠であったが、今回の學會では通常の研究發表と講演には形式上あまり違いが無かったことを附記しておく。

（2）　二年前の「道教週」については、酒井規史「國立政治大學『道教週』參加報告記」（『東方宗教』第一二九號、二〇一七年）を參照。

（3）　この場を借りて、招聘していただいた謝氏・林氏・張氏に厚くお禮申し上げる。

（4）　近年、海外では今回の「道教週」でも登壇したKenneth Dean氏、國內では坂出祥伸氏・二階堂善弘氏などが精力的に東南アジアにおける調査を行っている。